

誹諧隱蓑卷上（翻刻）

校訂 雲英末雄  
校閱 中村俊定

本書は早大図書館蔵、横本一冊。縦十三・三センチ、横十九・三センチ。匡郭単辺。板心無郭（但し五丁から八丁まで四丁にわたり板心に匡郭あり）匡郭縦十一・二センチ、横十七・八センチ。本底本は元表紙ではなく、題簽も書いたもので、表紙左肩に、

俳かくれミの上  
諸の発句

と記してある。<sup>註</sup>目録題は俳諧

隠蓑巻上春（以下夏・秋・冬と同じ形式）。内題は、隠蓑巻上春（夏以下は内題なく直接季語を記す）。板下は序文・本文とも同一人と思われるが、誰の筆になるかは不明。似船の俳書の板下は、多くは一族の富尾左衛門嘯琴の筆になる（『苗代水』元禄二年『勢多長橋』元禄四年『堀河之水』元禄七年等）が、この書の板下はいささか異なる。墨付は三十九葉。序文は一丁半、一丁目表は白紙、一丁目裏からはじまり二丁目裏で終る。本文は三丁目表からはじまり三十九丁目裏で終っている。行数は、序文半丁十二行、本文半丁十四行。板心には「蓑上……（丁附）」とある。ただし夏・秋・冬の始まる部分は「蓑上夏……十六」「蓑上秋……二十四」「蓑上冬……三十四」と夏・秋・冬を柱刻にて明記している。

本書は『俳諧隠蓑』の零本であるが、『如意宝珠』や本書の序文等からして下巻は、連句か附句を集めた『隠笠』であったと思われる。すなわち『隠蓑』『隠笠』で一部をなしたものと思

われる。このことは、『諧渡奉公』（延宝四年三月廿五日汲淺編）に、開板ナキ分として十四番目に隠蓑、似船とあり、又『阿誰軒俳書目録』にも隠蓑、隠笠、似船作とあるところからも知れよう。（ところで学習院本裏表紙扉に三冊之内連可とあり、又三浦若海『故人俳書目録』には、隠蓑、隠笠、三、延宝五、如意宝珠、追加、同（似船）とあるところから、本来は隠蓑上下二冊他に隠笠一冊とする三冊本であろうか。）

〔凡例〕

- 一 漢字の正字・略字は概ね原本のままとした。
  - 一 仮名の翻字については、変体仮名は平仮名に改め、片仮名のもはそのままだ用いた。振り仮名はすべて原本のままであるが、子はネに改めた。
  - 一 本文の改行・句読・濁点等はすべて原本のままとした。ただし序文の改行は無視した。
  - 一 丁移りは一丁目表の終りに（一オ）、一丁目裏の終りに（一ウ）と附して丁数を示した。
  - 一 虫損の部分は学習院大学本で補ない（）学とした。
- 註 学習院大学国文研究室に蔵する殿田文庫本は、原装本であり、題簽は中央に「かくれミの上」とある。閲覧をゆるされたことを御礼申し上げます。

## 『誹諧隱蓑 卷上』解説

この書の編者は、富尾似船である。この書成立の経緯については、『如意宝珠』（似船の師安静編）の似船序文により、うかがい知ることが出来る。その序文は、四丁にも及ぶ長文のものであるが、その最後の部分に、この書に触れて、

続て此集の追加かくれ蓑かくれ笠と号する句帳を此夏のはじめより撰ひ集るころろざしハ師恩を報じて徳を謝する追善ともなりねと也 延宝二年四月九日洛下柳葉軒似船謹而序す  
(天理図書館綿屋文庫蔵本による。傍綿筆者)。

と述べている。このことによつて、『如意宝珠』の追加として『かくれ蓑・かくれ笠』の編集が延宝二年夏より計画されていたことが明らかになる。『如意宝珠』の刊行までの経過は、その似船序により知ることが出来る。それを抜き書きしてみると左のようになる。

○寛文五年、安静『如意宝珠』撰集の計画を立てる。

○寛文九年秋、全国より発句、付句合計三千余句が集まる。その編集を終え、九月上旬、板行に及ぼうとする砌、安静風邪

を引き、その風邪が原因となつて同年十月九日没す。享年五十余才。

○延宝二年、似船の手により、安静没後五年目にはじめて書林長尾平兵衛より『如意宝珠』板行される。

このように編集を終了してから五年を経て刊行された『如意宝珠』は、似船が序文で述べるところと、時代遅れの感はあつたにせよ、作者四百九十人、国数五十一ヶ国、句数三千四百四十五句(宛句四百五十二付 句六百九十三)の規模を誇る一大撰集であつた。

『如意宝珠』の作者の主なるものは、貞徳・素桂・季吟・伊安・友静・但安・信徳・似空・似船・高寿・酒粕・貞林・保友・蟬吟・宗房・心計・調和・蝶々子・忠知等であり、おおむね、貞門俳人であり、似空・似船一派の人々であるが、信徳や、蟬吟・宗房などの句が入集しているのは注目すべきことである。

ところがこうした『如意宝珠』の追加として出版された『隠蓑』は、『如意宝珠』の貞門風とはことなり、かなり内容の新しきものであつた。それは、延宝五年似船自序という年代の新しさにも関係があろう。京都俳壇において、我々はこの延宝五年に、新風の一つのはっきりした動きを見ることが出来る。『後集総合』（高政）しかり、『散帯』『蛇之助百韻』（常矩）しかり、『釈教俳諧』（自悦）しかりである。今まで、ともすれば、大阪・江戸に

遅れをとっていた京洛における新風談林俳諧は、ついに伝統的な古風貞門俳諧をも凌駕するを勢いを示しはじめたのであった。こうした新風の動きに似船も決して無関心ではなく、相当積極的な動きを示している。この動きの具体的なものが『隠蓑』だったのである。勿論、『隠蓑』には、『如意宝珠』の追加としての意味があり、このことが似船をして十分積極的に新風を誇示するに到らなかつたらしい（『隠蓑』序）（文を参照）。

しかしながら、その内容を見れば、『隠蓑』は、似船における新風談林俳諧への移行を示す、最初の撰集であることにはまぎれもなく、その点に我々は留意すべきである。それは撰集に入集する人々を見てもわかる。すなわち『如意宝珠』の貞徳・季吟・友静・酒粕・調和等々の俳人たちは姿を消し、純粹に似船一派を中心とし、信徳らの句数を増すといった撰集の仕方である。こうした新風への傾倒は、さらに翌延宝六年の才旦三ッ物に著しい。

つげて明ぬ玉子の親ぢ世界の春

芦月庵  
似船

ひとつの若餅きねの滴瀝

柳燕

宿の松戸板をたくく東風そへて

可周

この才旦の引付は四丁にも及び、似船一派の勢力を示すものである。この引付の連衆は『隠蓑』の俳人たちと多くは一致している。

ともあれ、『隠蓑』は、『如意宝珠』の追加として編集されたの

にもかかわらず、似船の新風談林俳諧への最初の傾倒を示すものとして、注目に値すべきものであろう。

ついでに『誹諧家譜』『俳家大系図』等を中心として、似船の略伝を記しておく。

富尾氏通称弥一郎、名重隆。別号、柳葉軒。芦月庵。雜髪して似空軒二世、続て似船と改む。京五条通り東洞院東入ル朝妻町に住し（『京二羽重』）、後、さめか井通七条ノ南鎌屋町に移居した（『堀河之水』序文）。宝永二年七月十六日没。行年七十七。編著はかなりな数に及ぶ。

『蘆花集』（四冊 寛文五年三月）<sup>註(1)</sup>、『独吟大上戸』（一冊 独吟二百韻 延宝四丙辰三月日）<sup>註(2)</sup>、『石山寺入相鐘』（一冊 延宝四年刊）、

『隠蓑』（欠一冊 延宝五年序）、『火吹竹』（一札 延宝七己未季秋）<sup>註(3)</sup>、『安楽音』（延宝九年刊）、『苗代水』（元禄二年刊）、『勢田長橋』（元禄四年刊）、『堀河之水』（元禄七年刊）、『千代正月』（元禄十年刊）

師系は、荻田安靜門。門下には、『京二羽重』の林鴻や、鞭石・有扇・舟露・滴水・鉤軒等がいる。

註(1)・(2)・(3) 『阿誰軒俳書目録』による。

（雲英末雄）

誹諧隱蓑

墨やりにて海をかへほし  
浦辻毛錐子をつかひさね  
にて高嶋龍淵の底にあな  
る如意寶珠うちての小槌

を荻田姓似空先生。あるとしのしはす廿日余惡魔外道ハ  
西の海へさらり厄はらひやくおとしの聲を帆にあげて來  
るたから舟のたよりにたま〜借用の後ハ御所文匣に鑑  
て蔵したりしをいにし寅の年かとよ善買の入銀にて濱ち  
とり跡を桜木にとゝめをき(二)しほ風こえて今までも花  
の香とをく世に残れりしかのミならず玳瑁の玉くしけを  
みればかくれ蓑かくれ笠のとりおとしてあめるをさかし  
出侍りて書堂の軒ふく風をいるゝといへともしミつきた  
るふるくさゝ世の人ミ鼻つまみあちらむぎ給はん見るや



(四ウ)

うにこそ侍れよしそれとてもなんとしよふ丁子びやくだ  
ん沉甘松よ。よきやうにとりあへせたのまん(三)お皆延寶  
五年ひのとの巳九月十五日洛下芦月庵富尾似船序(二)

誹諧隱蓑卷上 春

題

- |     |      |
|-----|------|
| 元日  | 若菜   |
| 初寅  | 霞    |
| 鶯   | 梅    |
| 春雪  | 佛別   |
| 柳   | 薇    |
| 花   | 桜    |
| 桜鯛  | 三月三日 |
| 付魚  | 付桃花  |
| 春鳥  | 歸鴈   |
| 蝶   | 蛙    |
| 猫妻戀 | 春草   |
| 躑躅  | 永日   |
| 雜春  |      |

「三オ

「三ウ

「四オ

隱囊卷上 春

元日

門松のあらへす徳や君子國  
大ぶくや花に出へき茶行厨ベンコト

横雲や本江戸紫明の春

當御代になんの鎖前藏ひらき

延寶四年の元日に

新御殿るりをのべたり君か春

別へないぞ弥勒ミツレの世まで君が春

大下馬や神代もきかす今朝の春

つもりがたし御勘定衆も御代の春

藏入のかねよりしらり明の春

よべ八年をなぜ惜おぼけん今朝の春

案内はたそあゐこゝな若わかあひす

不老門の宿札どなた若わか蛭子

薬子や傳ふ本家御ゆるし

年の内に春立ける丑の元日

春やとき牛やをそふて去年今年

四十にいたりて

諺	石	阿	小	鳥	岸	若	林	神	徳	西	阿	内	似
	幸	自	昌	重	令	令	連	伊	自	可	但	宗	安
	津	形	原	本	田	江	江	原	軒	川	形	本	野
世	詮	笑	好	隆	之	可	安	休	周	安	英	静	

覺えたり茶事の味を老の春

きけいよし唐も御馬で君か春

かけ鯛や二口合せて千ミの春

国の春先よミそめや江戸鑑

たつはるや月頭に八東にあり

長久ハ江戸分別なり御代の春

君か代やイニ曰ク是聖の春

一ツ書萬春あり亀の甲

大藏節分なれば

寶舟のほて打間にや明の春

蓬萊の嶋シメズ繻子うれしきそ始

春たゝぬ年の元日庚申

神の春にさき立やかかえ猿田彦

穴藏やほり出しすつる江戸の春

鶏日のいつる光りハ鶏冠トウガかな

蝦夷仁エゾニが鬚ヒゲなづとも尽し国の春

なんと富士の發句聞たし今朝の春

立すかた世界の伽羅よけふの春

かいた物がものいふや曆けさの春

祇園あたり心やうきて若わか蛭子

大	新	女	芳	松	日	江	國	津	女	芦	岡	奥	奥	中	西	田	石
香	重	蘭	一	廣	歲	勝	慶	不	か	似	昌	一	松	知	正	宗	元
藏	家	厨	賀	賀	井	小	領	村	つ	月	田	村	田	村	村	中	村
久	政		品	諶	盛	信	命	野	学	庵	倫	豫	以	連	直	有	之

丸ごしやもろこし迄も御代の春

歳賢トクや朝鮮あふきにほん入

いかに詩人春秋を富にしさかな

いせ海老シノブやははかへつた春の色

山海の仁物シノブらしやかさざりあひ

家業をことぶきて

むかふ餅の鏡に見えつ佐渡小判

若水は私宅に三つの始かな

供なりや抑これハとしおとこ

東君の御借米かもほんたへら

年徳に爵もそへたし三の春

今朝来る春へいくつそ明六つ

まゝごとの昔やうつつ鏡餅

齒かために塵砂かたく禁制也

加州金澤にて

袖にかほれかゞに梅はちきそ始

日や早くお出の由まふ今朝の春

弓始射よく見まく星あたり

書そめをあそはせ天筆わかう様

かくばかり手かたくみゆる試筆哉

内本一

政次五ウ

松重永

岩友尾

人見さと

嶋氏十一歳

中久尾

富信尾

江久生嶋

安久師

和及

獨村

松前住

土藤氏

今年の卦此星に當けれハ

光りあり木曜星キョウメイを年の花

元日はつとらなれハ

初とらや一日に千里今朝の春

松竹の飴たてなりかぶき門

延寶三年正月三日祇園林に

松を植たてまつりて

植ましてしんぜんや猶かざり松

裏白やおもて浅黄に春の色

はつ空や七十五日はなの春

春くるや江戸萬歳に都なを

若水やつかひざかりの年男

代は源氏春日かゞやく宮古哉

住宅より因幡堂え方に

あたりけれハ

え方よりさす琉璃光の春日哉

懸乞も今朝ハ笑はん花の春

まく砂ハ枚取ぞよみて御代の春

かざりなハや五百八十七たくり

天の戸や發端の札はるかすミ

加納直

江慶命

伊安

似船

宗英六ウ

可周

連可

宗有

自笑

自休

伊安

西晶

諷初や手拍子人にハアヤアハ

若恵美酒秤を取てわたくしなし

門姿は大夫もとなり若多ひす

握つたりはいかいづかを筆始め

四十になり侍る元日に

若白髪とおもひしも今朝老の春

かしらおろし侍りける明る

としの元日に

しづかなり山居同前門の姿

かきそめや一しめの内の多ひす紙

書そめや唐土ハ詩など日本に和

京ハ山も塵やひねらん門の松

京の圖を彩色けりなけさの春

はつ鳥や二番に麒麟御代の春

若菜

主人けふ初て信國の腰物を

帶したると宜ふを祝し侍りて

くゝたちに齡ひをやのぶ国の守

雪解で菜そくしるき畠かな

酒剪や霞をつとふうくひす菜

令之

可周

宗有

一豫セオ

宗英

自休

但安

幸詮

軒松

似船

同

伊予松山秦氏  
一景

肥州くまもと  
正澄

同所  
冷笑

「セウ

初寅

はつとらや狩野のさは姫書之

霞

此世界へうたんのごとし朝霞

但安興行

山も一つなるとみえたり薄霞

鐘の聲つゝむふくさか八重かすミ

鶯

鶯や春統院の沙汰の外

春の色やはつねを告る鶯茶

鶯や竹斎の弟子吟の声

梅

袖ふれしどこの伽羅様梅のはな

玄了興行

方組や者婆が傳へし宿の梅

むめが香のゆくゑや爰に書物櫃

肺よハき人などがめそ梅の花

梅に学者磁石の針の類ひかな

天神奉納

我作はいつか飛梅御照覧

宗有

令之

似船

重政

幸詮

似山

松船

女房  
かつ野

似船

重高

正直

熊取  
貞

加州金沢高田  
貞之

「ハオ



松むめや三本の内月の笠

似 船「八ウ

春雪

はげ山や春をねだれん峯の雪

似 船

万句 春さむし紙屑籠にミねの雪

可 周

仙臺の人の追善に

往生をせんだい供やはるの雪

但 安

罪消懺悔の心を

山下にやつミしも消て雪なだれ

伊 安

淵に兩つけたり山の雪なだれ

星 信 田 利

佛別

うや涅槃世が世のときハ生如来

神 伊 原 安

芦月庵月次 二千余の手形有けり蓮教經

諺 世

繪に拝む頭北面西うき世かな

似 船「九オ

餅花の風やきさらぎ十四日

重 政

年代記なミだにひたす涅槃哉

因 氏

肱を曲て寝たが仏ぞねはん像

伊 安

柳

酌楊枝やなぎの情ハ洗れたり

令 之

菘

野遊びや焼飯にぎる初わらひ

志州鳥羽住 住 心

花

待花にあゝら珍しやいかに吉野

三 諺 谷 世

京は花を客を待らん東山

可 周

花さかば鼻にや告む山おろし

江 久 隆「九ウ

駕や花を帆にあげて通り町

似 船

朝起やかねまふけより花盛

江 勝 信

にくふなし柳にハ風はなざかり

但 安

清水寺に詣侍りて

雲の脚や舞臺またぐる花盛

女 かつ 野

上京の時に

上洛やたゞさへあるに花さかり

肥州隈本村 隆 安

按摩とりや枕ひねらんはな盛

お 獨 放

宿の留守秋こそかよへ花さかり

市 忠 次

通ひせばし酒屋のいはく花盛

不 学

大仏や紅葉のこりて山は花

服 安 周

似船と兩吟に

得て見たし天眼通を四方の花

自 體

書付てへぎに預けつ花一木

沙 未 辨「十オ

上智だに氣やうつりかぐ花鳥

神 日 盛

朧夜の玉兔やねふるはなの屋

伊 原 安

僕ひとり茶磨に眠る花見かな

山や花ひがしへまへつて家くの

父の遺骨をおさめにまかりて

花見も親の恩なり高野山

花やしる京にいくたり大上戸

嵯峨の花見に此寺の旧跡にて

花そむかし時うつり事遍照寺

のきやらで月見る種や花の陰

花ハ吉野それへまだるし東山

よも山の花を都は棧敷かな

花の雪に人なだれする山路かな

花の下の半蓋の客ハお下戸哉

小石巽行

花の香を衣桁に残すゆふへ哉

ならべたし去年の名月春の花

祇園にて

いつもたてやよ八重垣の花の雲

僧に法寺の花にハ嵐かな

脱かくるもミウら花の時雨哉

山姫もふたのやあらふ花の瀧

似 船

西 正 直

但 安

似 船

伊 安

江 久 隆

似 船

女 肥 隆 安

伊 安

伊 安

似 船

加 州 山 中 塚 谷 家

伊 安

似 船

伊 安

同 船

似 船

加 州 山 中 塚 谷 家

自 笑

自 笑

花の下の半日のかゝや荷ひ茶屋

山青く花しろくして雲落居す

にくまじないかな禹王も花見酒

花をふんで惜まぬ物ハ蒔繪かな

風の神も我ををれ花に人群集

三線に色をつけたり花見酒

下戸の耳に入相のかねや花見酒

瓢箪で花に一首やよい口の

鷹ハ北斗花に横雲やひかし山

人ハ花見籠籠昇が目にハ銀子哉

酒樽や文車のふミ花の塵

おもしろや鳴ても須磨の花に鐘

ふたりして哥仙に

入ミだれつ兩吟たがひに花いくさ

いらぬものゝ大将ハ風そはな軍

雨ハもとさかせもしたを花のかせ

細工所のわらべらしくや花の風

千金をもとにしかねつ花のかせ

着婆よふらせ敗毒散を花の風

葉計やありへら寺の花は風

似 船

但 安

伊 安

伊 景

重 政

重 高

伊 安

良 胤

重 政

不 学

松 以

清 成

江 勝 信

慶 命

肥 隆 安

長 州 貝 田 氏 露 程 子

星 信 利

宗 有

松 以

以 十一

天王寺にて

ちる花や上官太子下化衆生

路次であふ近付多し花の後

桜

よしや吉野あたご高雄の初桜

芦月庵万句に

になひ茶屋もまだまばら也初桜

貞隆興行

千金や正面の曇はつきくら

山を削とくさかけたたり初桜

見たや人の姫ハ物かハはつきくら

町さびしさてへさいたかやま桜

花八年よるがさかりじや姥桜

たんざくやかゝれとてしもうは桜

人にかへり老てうつくし姥桜

熊谷ぞよつて怪我すな花の風

ざつと塵に染んへかなし糸桜

ちる花を鶯とちよいとさくら

老木もや那知八十の兒さくら

やうきひや白粉所花のもと

似 船

幸 詮

神 伊原 安

中 知村 連

似 船

同

宗 有

重 政

江州柳川住 隨重 十二オ

女 玉 水

女 蔵 房

増 青 尾 清

知 連

加州山中住 慶 山

いよまじ山 一 景

令 之

かんこ鳥京に鳴らむやま桜

ちる花に髪すぢも哉普賢象

桜鯛 付さくら魚

食物や山類水邊さくらたい

芦月庵月次に

なまなれや初花いそく桜魚

三月三日 付桃花 鶯合

楊枝木の杉のたちどや草の餅

花や桃三日めのワキ西王母

役にたつや三文雛もけふの節

鼈之助に下戸や馬繫桃の酒

古今の色つき白に有草の餅

もゝの酒機嫌の唇まつ笑り

ひめもゝや巴やまぶき柳かみ

合せ加減大事ぞ伽羅の油鳥

とりあへず贅したり繪櫃三日の作

いかに桃のあはれなからん花の風

春鳥

芦月庵月次

琴ふるし三線似せよ鶯の声

似 船

自 休

加州山中塚谷 元 重

正 之 十二オ

宗 英

似 船

但 安

自 休

西 可 周

正 直

道 由

辻 玄 竹

似 船

安藝ひろしま 親 之

十三オ

大 香 久

歸鴈

北国のちまたやあげて帰る鴈

蝶

蝶の外こゝに猫あり蝶の夢

蛙

いかに蛙魁とりひしく歌の体

猫妻戀

つま戀もゆる胸の火灰毛猫

つま戀の猫も陽氣や若ざかり

春草

はなふさハ赤態のごとし鬼助

荒たる古墳に手向して

墓なしや春の草のミなむあみた

鷹鷲

作おかし一重こえてもちつゝし

永日

村雲やながき日脚のひつかゞミ

雜春

うかれけり人を初き唇やらおかし  
うしと見し夜へもと忍ぶ余寒哉

いよ松山住  
景

同

野州宇都宮  
さくら井氏  
玄 玖

望月  
千 之「十三」

伊 安

松前住松氏  
忠 廣

伊 安

肥州隈本まなべ  
正 澄

同所村井氏  
冷 笑子

林 雀

江州サマ山本  
命 雅

「十四」

糸を見よ雲にかけ橋いかのぼり

うくひすの笛や春日はりつゝみ

安くして以て樂しめり張鼓

葩剪や舌の上にハむべも春の雪

春の林当風にうごく作も哉

正月にや拝ミたてまつる星仏

まんざいや舞て鳥さす持扇

娘にをくれ侍りて

鶴亀や世ハはご板の繪空言

紀州一見の時阿形自笑に

いひかけ侍る

はつ旅や抑自笑の春の比

田 八 中 郎

但 安

新 重 家 政

沙 未 門 辨

岡 保 本 氏 親

伊 安

松 山

ひこくま本  
冷 笑子

似 松「十四」

諺語隱義卷上 夏

題

更衣 餘花

牡丹 灌佛

郭公 螢

百合草 秋

早苗 五月五日 付馬蒲

夏草 薺

夕立 扇 付團

夏月 瓜 付小角豆

夕顔 祇園會

泉 納涼

暑 御秋

雜夏

更衣

小袖櫃やおもきがうへの衣かへ  
春をのこす余花に恥かし衣かへ  
しらかさね雪こそ匂へ袖香炉

餘花

関東へ續目の御札

有ける祝に

夏咲る花や繼目のだいかハリ

牡丹

新 宗 英  
重 家 政  
同 友 名 雪

いよ松山住素氏  
一景

十五ウ

鼠あれつさてへぼたんの花盛  
ねふる猫へぼたんよそ見や花籃

灌佛

竿竹に花さく卯月八日かな

郭公

待し去年の帳を先消せ郭公

言月庵月次に

待し花ハ咲てすんだそ時鳥

待し花の勝手あてたら子規

きかぬさきハよう待たりや杜宇

蚊の口や待夜のしるしほととぎす

聞番の耳さへうしと郭公

まかり出すハ町代つけん郭公

聞たしやかハつたはなし子規

江戸様へ初音をあげよ時鳥

耳ぞうき目ハ花も見つ郭公

遠めかね耳にあてたし杜宇

按摩とりなき世なりせば子規

郭公なかぬ間もなし積の虫

見せたしや古郷の扇ほととぎす

重 高 重 政 十六オ

重 政

但 安

宗 英

似 船

可 周

重 政

勝 信

奥 田

沙 門 辨 十六ウ

未 辨

林 雀

重 政

安 江

重 高

慶 命

郭公我に似あひの用もかな

おさへたしひとつなる口ほととぎす

かゆき所かくやうになし郭公

聲そへよつミ花うりに時鳥

つめらばや手がとどくなら子規

句や聞てはな紙になく郭公

芦月庵万句に

三途河の姥ハ無事なか子規

是非なかざ一句でつめん郭公

鶯のすをかりどりやはととぎす

ぢごく耳にかし座敷あり子規

諸事ハ金よされども爰に杜宇

黄泉の本意達せよほととぎす

松を時雨それハ非情ぞ郭公

公儀ものや雲井一はい郭公

雲を隣天人や友ほととぎす

けふも又あくびでずらり子規

頼杖ハなれやきりそめし郭公

ほととぎす聲や本來一物

夜更るに待わひ侍りて

伊安

那延氏晴

岡保親

幸詮

文竹

可周

西村直

正直

松以

正久

服部周

重高

似舩

一景

宗有

光能

倍笑

重高

貞忠

鳴ハ羽われぞかしらかく郭公

越州駄口といふ所にて一聲聞て

ま一聲あだ口もかなほととぎす

鳩ハ伽羅の香にも來鳴を子規

まゝにせよわら屋の雨ハ郭公

二聲やはめぬる我とほととぎす

あすもきかん鬼ハ笑ハふと子規

やふ醫師も茶匙に功あり杜宇

鳶に聲をかけられたるか郭公

山法師かも川の水やほととぎす

おれほどに思ひをかけよ杜宇

螢

唐の大豆はねがはへてや飛螢

宇治にて

聞するハ一來はしかとふはたる

皆水から明らかなるや飛螢

とふ螢棒ふり虫や夜番の火

人に追れ氣や夕殿に飛螢

ひじり行燈もゆる螢や職がたき

火の手あかるくるしふもなし飛螢

伊原安

江州サツマ山本

辰昭

重政

加納氏辰

星田安

星田利

江州伊香久郡

川正英

長州貝田氏

露程子

丹州山國小島

守祥

信徳

神原安

白井盛

軒松

大興天満

少人負

加州山中水江

一七

百合草

草を百合せくすりハ花見哉

蚊

蚊をせむる手あり其盤の削屑

やすんずるや膝へいれねど枕蚊屋

いかに鬼蚊けふらす櫃ハ王地の木

蚊柱はけふりの浪の浮木かな

早苗

其聲皆庄屋にもれぬ田哥哉

五月五日 付福浦 印地 競馬

道喜こそ竹の菌生のさゝ粽

さうぶ刀さすがに我へ出家なり

さうふのほりお旗下さぞ江戸甲

つかまぬや鬼も控の江戸かぶと

粽むくや声の葉分の口の音

薬日や天下一同に御用ひ

さ月まつ鼻たれどもの印地哉

六日のさうぶを

抜あやめ竿のさきわる刀かな

をそくまかりて

加州山中住

貞 忠

新家 政

伊 安

星 田 信 利

野州うつのミヤ 玄 玖 十八ウ

幸 詮

松 本 玄 竹

喜吉荒神 智 泉

似 船

西 村 直

山 田 入

似 船

出口氏 貞 木

幸 詮 十九オ

雫とをし駒の頭もみえバこそ

落しうへハ怪我せぬが勝ぞ競馬

あやめ眞薦いづれ懸種まざれ物

夏草

うし若かぎぼしの花に飛こ蝶

足をとや見る人ばかり躍花

禪

一樹の陰一河の流れや禪の吟

令之家を修理せられし比

鋸やこずゑにひぶく禪の声

せミの經仏法あれハ哥道あり

延寶三年六月廿九日

一万句満座に

耳にみちぬ十声千ミ禪の吟

夕立

石磨に濕ぎぬきせつよだち雲

ゆふだちやながれハ人の脛巾下

夕立に笠きぬ人やさや走り

扇 付團

ござれとて風の手をひく扇哉

自 休

伊 安

内 守 定

女 尼 房

加州山中住 元 重

似 空

岸 田 貞 隆

野州住 玄 玖 十九ウ

似 船

重 高

熊 取 貞 茂

丹州山國小島 久 茂

似 船

江戶住小嶋 勝 信

地かミにも繪馬をかける扇哉

一類のふし有中をなをして

すどしやなうちわ丸く中直

ふる雪か杉の箱しろき銀葉

芥子に須弥富士を入けり扇箱

鼠ひきし扇のなりや崩れ山

夏月

芦月庵にて當座に

夏の夜やのミ口ぬきし水の月

自笑の許にて手水鉢の月を

水に近き炉路へ先涼し庭の月

瓜 付小角豆

水瓜そむる時雨の雨へ薄双哉

涼しさをむきうりにする眞桑哉

暑氣の沙汰さつと冷せるまくハ哉

ミのりの色顯す花や枝さゝけ

夕顔

夕かほの行水時かはなの露

祇園會

月鉾やあいさらあいと玉屋の門

白 歳 井 盛

いよ松山 景「二十オ

江州サツマ 命 雅

似 船

宗 有

似 船

宗 有

似 船

似 船

似 船

似 船

似 船

宗 有

出 口 氏 貞 木

伊 安「二十ウ

一 景

但 廣

少 吟 人 鳥

少 吟 人 鳥

少 吟 人 鳥

鹿を追も此山は見つ祇園會

入日いかになねかぬ月も戻ほこ

ふねぼこをうけて車へうしほ哉

泉

天下一御涼ミ所いつミ哉

納涼

芦月庵月次 索繩や清水をむすぶ瀧の糸

暑氣にさへ扇を捨る清水かな

風やはだか百貫道具夕涼ミ

暑

芦月庵月次 夕暮の暑さや人に見世のさき

御秋

流れけり光陰の矢も御秋川

今もやめぬ御手洗川に鯉屋哉

代参りきはへ唐崎の夜の雨

雑夏

大津道杉の葉しろしところてん

はつ雪の花の兄きや富士太郎

納にはいまつハれよ夏座敷

新寺の興行に

白 歳 井 盛

江 重 政

久 隆

信 德「二十一オ

信 德「二十一オ

中 次 川 吉

星 信 田 利

似 船

似 船

似 船

似 船

似 船

元 之

幸 詮

軒 松「二十一ウ

軒 松「二十一ウ

富 軒 尾 松

神 伊 原 安

望 千 月 之

望 千 月 之



造作や風あたらしき夏ざしき

かほる風やあまつをとめの身嗜

なら布や此てかしへの二つ紋

国の仕置し給ふ御かたへ申侍る

戸さゝぬや國の仕置と夏ざしき

からくりの水潜とやところてん

香齋門カウシュウモンを出るや医師イフシの御音信

水とんで鱧カッパをどるやところてん

沙未門 辨

同 鹿

おく田 以

江州サツマ山本

命 雅

中 川 吉

次 川 吉

似 松 二十ニオ

秋鷹 鹿

鷹 月

八月十五夜 付十三夜

碯 九月九日 付菊

葛 紅葉

洪鮎 木子

木實 雜秋

誹諧隱憂卷上 秋

題 初秋 秋柳

初秋 秋柳

七夕 秋柳

秋扇 秋柳

稻妻 玉祭

踊 文月

萩 女郎花

蘭 蛭

「二十ニウ」

初秋

簾あげて内證みるや今朝の秋

詠の風も出来けり今朝の秋

涼風や今朝ハつりとらん金の秋

腹あてを背セナカにもがなけさの秋

風の破るはせをや目かど今朝の秋

秋柳

散ゆくや釘目はなれし箱柳

七夕

宿からむをなご一人に男七夕

「二十三オ」

西川 周

江戶住小島 信

新勝家 政

田中 有

松重 親

望月 之

千 之

素 雲

「二十三ウ」

雨の夜や巢父が心おたなはた

さこそ濕め星のふんどし銀河

ぬか星や手洗につかふ天の川

あまが紅粉の末つむ花かめたなへた

空色につけて思はくやふたつ星

梶の葉の哥の種也手習ひ子

ふたつある星ハ文月の独り哉

梶に哥天も響けとよミ上たり

ぎんがりや七夕まつり又おかし

きぬくやぐんにやりとせんお七夕

わかるゝや起あがり小星あまの川

むつごとや五十六億七夕まで

秋蟬

せミの經うらぼん様を師匠かな

秋扇

もち扇時宜一へんそ秋の風

残暑

扇をかでもてあましたる暑哉

稲妻

いなづまの光やをのが顔のつや

肥州クマモトノ住  
隆安「二十四オ

小原昌好

千之

似船

大香蔵久

新重政

國領命

奥松田以

宗有

同

但安

似船

東忠次「二十四ウ

似船

神伊原安

似船

女春房

魂祭 付施練鬼 地藏祭  
灯戸 荷飯

むかひ鐘路銭にしてや玉祭

道しらば鴛籠かきいでん玉祭

嬬魔王ねずみやひかん玉まつり

鐘の響に無常を親して

是をよそに聞やほう玉むかひ鐘

玉祭しもくや鬼をせめ道具

旧年慈母にをくれ侍りて

乳を飲だむかしにかへれたま祭

愚子ハなんだ燈くらし玉まつり

鬼殿やかな棒まくら玉まつり

寂滅の貝よりや出る玉まつり

見る目かぐ鼻あかせけり玉祭

申いれて念仏一種ぞ魂の客

あひ客ハ長老様そ玉まつり

うら盆や善もなしたし小借錢

父にをくれけるとし

打つけに物そかなしき性灵棚

賊の怖有て世中さハがしき比

宵にきませ門がきびしい玉祭

林連姓可

幸詮

似船「二十五オ

伊安

可周

伊安

元世

但安

似船

川一正源 豫

宗有

不学「二十五ウ

似船

麻がらや魂のくるく水車

樂あみや餓鬼阿弥か苦のうら盆會

ふた親におなじ末葉そ荷の飯

頤ワカに露や一粒はすのめし

地藏万句まつり石にせい有かねに音

ちさう祭六道の辻にお出かな

黄蘗山にて

誰が目にも唐がうとこそみれ大せがき

水せがきや經木別傳ふるふ文字

功力にや見えてうかまん水せかき

紙灯籠ヒコトケシけに棚經ヒコトケシにも如渡得ヒコトケシ慥

うすものゝ螢か銀ぎんのとうろの火

まき狩や昔をかへすまひ灯籠

かへるなり人ハ根芋こんごに花とうろ

隠

夜芦月庵月次ぞ更ぬしろきを見れハ大踊

をとる聲に隠居かくし悔くまん裏屋哉

桜ちりしうさも忘れつ伊勢躍

をとり哥うたに打越うきらふ疎かな

手のふりをほむる文月の踊かな

宗 有

伊 安

素妻男  
吟 鳥

若 江  
令 之

重 高

元 之

昌 好

慶 命

東  
忠 次

素 雲

宗 英二十六オ

令 之

似 船

幸 詮

元 之

一 豫

貞 隆

丹州山國  
久 茂

月次  
よそのふりみてや止なん馬鹿バカ踊

くつしぬる人や哥ウタ屑クセばかをとり

文月

春の鷹トビや届とどし返事文月夜

ふみ月ハかハつた風の手筋かな

山のはを出る文月や江戸飛脚

荻

風体や庭の荻原あしまつ宗祇

女郎花

殿風とのかぜにたハれめなるや女郎花

花ハ粟あはかたちや菩薩ぼさつをみなへし

蘭

ふぢばかま誰たれ脱だかけしれんだい野

うら付うらや下葉した色いろづくふぢばかま

虫

たぎる茶の湯松まつ虫籠むしや四疊大

秋鷹

革かわの外う鶉うまきなり鷹たかのせこ

鹿

芦月庵月次  
いざとりて鹿かのねきかん塗履ヌリジマ

元 之

可 周

星  
信 田  
利二十六ウ

市 川

加 忠  
嘉 納  
辰

似 船

似 船

肥後住むらせ  
隆 安

神  
伊 原  
安

似 空

但 廣二十七オ

井 上  
何 可

いよまつ山  
一 景

信 徳

万句  
人もなげにぬれてや鹿の女夫づれ

鷹

万句  
羽なくて近年わたるがんかかな  
誰からの指南うけてか渡る鷹

月

月のかほや願ばかり三日の空  
風を含む舟の帆なりや三日の月

蓮華王院にて

天下一誰あらそはん月の弓

子細あらむ山の腰をす月の舟

出にけり指のはらより雲の月

月しろししかとめに見る秋の色

老眼も水にへちかき月見かな

月や水に浮世かまへぬ影法師

江戸にありし比水邊の影を

京にてへ見なれぬ月やすミた川

なでよ風ハ三度四度も月のかほ

宮谷頼母亭にて月を待て

影法師まだ在江戸か峯の月

氣高しや月の桂のおとこぶり

重高

高瀬

正世  
かへせ  
吉「二十七ウ

國領

慶命  
伊与松山住  
景

神原

伊原安  
豊後府内野村  
昌雄

川井

伊安  
丹州山國鳥居  
照清

秦氏

一景

東伊安

忠次「二十八オ

井上

何可

江戸住  
久隆

月の桂ゆすれば動く手桶哉

老て世に交る身を親して

いりまへも知ぬやくらき胸の月

自笑興行

花とのミ何かた意地に秋の月

月しろハ四万由旬の天しゆ哉

心こゝにあらざる物よ月の雲

人のめづる聲に月見や清言

芦月庵万句の翌日興行

月によるや透間かぞへのたゞの會

十四日の月を

入月や雲を會紙のをしはづし

風や月に二千里の外米屋の心

十五夜の月や引つめた弓のなり

辻玄竹興行

守れるや醫王全盛やどの月

父三回忌に

おも影を月とや三世の佛良

ものゝ本ハひろげた計窓の月

晴た見よと風鈴告けり月の下

重高

伊安

似船

加州山中  
定重

伊安

江州サツマ  
命雅

水音

但安

可周

丹州山國  
久茂

似船

慶命

重政

肥後くまもと  
隆安

「二十八ウ

万何  
手つるべや猿猴もどく水の月

影ながらお噂申す月見かな

月次  
芋うりの辰籠にや暮の月

明るまでなかめおりて

これも又日影きのどく月の雪

落る月に蹴躓たるごろたかな

有明のつれがなそれハ壬生の月

雨天にむかひて

摺粉木て芋もることし月の雨

八月十五夜 付十三夜

秋を愛と誓文で聞むけふの月

休め目金際とらするぞけふの月

慮外ながら名取て月ハ何の為

うか／＼とあすの頭箱やけふの月

ごよざ喚に月夜と知ぬけふの空

名月や正月もどくかゞミもち

名にあふミ今夜の月や多景嶋

嶋氏久隆亭に白澤の圖かゝり

侍り折節三五の空曇けれハ

白澤よこよひ雲くへ宿の月

幸 田 詮  
良 胤  
連 可

慶 命 二十九オ

沙 未 門 辨  
女 梅 房

令 之

神 伊 原 安  
服 如 部 心

似 江 戸 生 船  
勝 門 信

沙 未 門 辨

光 能  
命 雅

江州山本氏 二十九ウ

伊 安

手柄哉十有五にしてけふの月

唐の芋や名ハ先立て今日の月

葉の露や芋が劫經てけふの月

月や今宵菅す毀ず出ず入ず

紅梅染屋不学興行に

天下一の名やゆるし色宿の月

実が入や人ハあふのく豆名月

はきだめや月の名残す豆のさや

礎

針うりや礎に聲のしたり良

九月九日 付菊

柴栗に菊の花さく繪櫃かな

きく酒や彭祖が名代七百兩

一息に千世や呑こむ菊の酒

四十にいたりて

菊水や腰にはるべき弓ながし

きく酒や秋の愁のいろなをし

飲ぬけや匂ふがうへの菊の宴

祝ふ栗やおさめの節のひやし物

唐船や薬種もよしな菊の酒

松 以

宗 有

長 吟 鳥  
法 好 眼

似 良 胤  
中 村 連

似 船 三十オ

但 安

香 久

通 外

似 船

伊 安

但 安  
重 高

おながれは半偈の露か菊の酒  
本方ツバタや一日ひたす酒に菊

香具屋重次興行

こゝにあり彭祖以來の菊の露  
淵に雨のあまりやはろり菊の露  
そが菊のさても其後花もなし  
典フシヤク薬も茶匙チャシを捨らん菊の露

蔦

上塗の大坂つちやつたもみち

紅葉

若も朱座訴状や上むはつ紅葉

久しく音信さる友のかたへ

見にハよもや主アノミが多りも薄紅葉

井上何可のもとにて當座

酒ハ紅葉炭ツグ園おこして烟草哉

嶺の松や見れハ見る程こいもみち

上京の時東福寺にて

紅葉見やつてん通天三筋の絛ツグ

ちる紅葉はきためを秋のとまり哉

遊帖

光能  
似 船

「三十ウ」

同

江州サツマ命ツマ房ツマ雅

女蔦房

可周

内海守定

似 船

伊 安

服部如心「三十一オ」

一 豫

加州金沢高田貞之

肥州隈本原善子

質屋にて

ながれものゝさひ帖や九寸五分計

木子

地松鞆関東までもかくれなし

木實

洪シ柿の味をかへてけりあまほうし

雑秋

涼万句ミ過て床すさましや秋の風

連可興行

秋風や鎖に手かくる小袖櫃

曆みてやおどろかぬ秋の風の音

くいてけり猫一口にあめの魚

のむやいかにうハの空ふく若烟草

からうすに秋の聲あり今年米

花もかな春やむかしの梅もどき

暖万句簾や時雨ぬ軒の柿もみち

やゝ寒しをとなもとより秋の風

むせふおもひ戀の煙か若たはこ

きつとしてしかりつべしや鳥をどし

平産の祝にまかりて

加州山中塚谷増家

井上何可

宗有「三十一ウ」

徳峯軒自休

似 船

伊 安

信 徳

千 之

沙 門

未 辨

宇 野

玄 清

重 高

高 岡

伊 安「三十二オ」

祝ふ哉産後夜食の新酒ひとつ

万句 たとへ山が變化たりとも松の色

松の徳へたと其まゝの色葉かな

夜寒さを下戸に譲て寢酒哉

信徳興行

はだか枚寄に帯をさせけり秋の風

兩替尺麁興行

つかさどる金箱や世界宿の秋

肥後真鍋氏

正澄

元之

伊安

熊取氏本

似船

同

誹諧隱囊卷上 冬

題

初冬 時雨

落葉 歸花

霜 寒草

冬月 氷

霰 雪

水鳥 埋火

冬梅 茶花

「三十二」

衾 神樂

佛名 節分

雑冬 歳暮

初冬

留守やしる日本の神初しくれ

来る冬や北野におゐて神の留守

奈風へお茶をひく也神の留守

別に誰もこま犬ばかり神の留守

のりものや列子がまへす神の旅

時雨

時なる哉紙こうる聲はつしくれ

赤土や下駄の齒そむる村しくれ

追風ににげ足はやし北しくれ

月は月水際たつたり一時雨

東国下向の時

菊川によくにつ坂やさよしくれ

河音や松をしくれの一談合

「三十三」

「三十三」

若令江之

新重家政

岡保親

軒松

似船

新重家政

但安

中友尾之

井上可

何上可

似景

似船

「三十四」

似空軒安静七回興行

したふ涙會紙をそむる時雨かな

落葉

冬の來て山ひくふなる落葉かな

月次  
木葉ふり峯やかましく松の聲

かしハ木や戀に朽葉はお三さま

貞隆灵山にて興行

木ミハ枯つひとり口きく松の風

歸花

もとをのが家ざくらとや歸花

似空七回忌かさねて興行に

便宜さへなき人かなし歸花

霜

あさ霜の嗜したる野は哉

鐘突をうろたへさする霜夜哉

宗英妻の喪に籠侍るを弔ひて

霜にかれぬ女松もあるを主人妻

寒草

追善に

人香ばかり扱ハ夢じやよ殘菊

同

田中  
宗有

女房  
可周

似  
船

神原  
伊安「三十四ウ

似  
船

重高妹  
光船

同

追善に

おく田  
松以

冬月

めづる意地も秋ハ見分す冬の月

水 付水柱

あない心もとなき山路にて

ところの人わたり候歎うす氷

ゆく水や岩にやどかるあつ水

巴なミのながきつらゝや眉間尺

浪の花に冬かれさする氷かな

霰

似船興行に

瑕なきや築原はしる玉あられ

をどりあふや時雨はしれバ玉霰

雪

いくら銀をしかバ初雪今朝の景

北方の興たりけふのはつ深雪

どこも雪目ハ黒いかのみてたもれ

しろかねや職敵とや雪の姿

本國寺嶽松院にて不及興行

妙やこれさしあたつてハ雪の松

面白のろの字のけたり笠の雪

似  
船

女房  
松以

いよ松山  
一景

似  
空

吉田氏  
宗英

宗貞「三十五ウ

橋本  
重高

江戶住  
久隆

神原  
伊安

若江  
令之

似  
船

与州松山  
一景

「三十五ウ



雪折の竹や阮籍がまなござし

黒白や雪にあらそふ冬の色

鬢しろしむかしハ袖の雪こんこ

杉原やよし野の雪を都人

杉原や紙はわれぬる竹の雪

履にハ落花をふむや雪の道

笠の雪すほめる花の色もなし

醍醐山清瀧権現奉納

雪や花かれ木も歌のだいご柴

屏風こそ花見の幕よ雪の宿

但安男を儲給ふを祝して

御子息に千世進上や雪の松

雪の夜や願ちかきひざのさら

箒目や雪を栄耀にもちの皮

降そふやあられ仙人雪ほとけ

誰かいひし濼觸しれぬゆき女

竹ををつて潜かにもなし窓の雪

咲分か炉路の雪花炉の火花

石に音水にせい有雪つぶて

覚えたか端午の意趣を雪際

奥山 松以

野州櫻井 玄玖

田中 宗有

沙門 未辨

中川 次吉 三十六オ

似 伊安 船

似 伊安 船

新 重政

宗 英

似 船

加州山中生 元知

重 高

熊取 重貞

伊 安

内 西本 一

伊 安

重 政 三十六ウ

似 船

似 船

水鳥

薬食や鴨ハかんじて水入菜

浪の鼓手やいひ合す友千鳥

友達の追善に

あはれ位牌あしがた計友千鳥

一豫父の追善

泣よりの親類衆さそ友ちとり

埋火

鋸にひけばもと末輪ずミ哉

但安亭にて當座

をく炭や火鉢の鬼に鉄火箸

井上何可興行

その箸ぞ薫る井上の桐火桶

冬梅

餅花が匂ハどねためふゆのむめ

茶花

ちやの花や人事いひの若さかり

衾

いとゞ敷過にしかたや破ふすま

神楽

望月 千之

中尾 信行

似 船

同

津村 不学

似 船 三十七オ

似 船

星田 信利

似 船

肥州櫻井 真鍋氏 正澄

祇園社奉納百句巻軸  
あげ句もやいはゞ名残の神樂哥

佛名

手習の師の十七回忌興行  
となふるや念佛師匠撰取不捨

節分

高軒はなを帆に揚つたから舟  
老といへる怪物の種や除夜の豆

大かたハ是をもめでし除夜の豆  
えにし結ひける年の節分に

君と敷て舟で年越のともね哉  
山家にも乗やこよひの寶舟

寐庭やほに出て招くたからふね  
雑冬

つミ綿や袖にみなとの浪の色  
音もせでくるよしも哉核木綿

旅宿にて

旅なるかな松寒ふして破夜着  
むな紐やかミこ羽織のミしめなハ

家業を祝し侍りて  
釣の糸あがりうけたり輕子講

達磨忌にそも參詣や佛心宗

神原 伊安 三十七ウ

似 船

江戶住小嶋 勝信

岡本 保親

重高

しけ高いもと 光直

丹州山田北氏 清直

与州松山 景

女房 雪房 三十八オ

肥州隈本 正久

重高

日向縣住林氏 樂意

奥田 松以

与州松山 景

二打鐘扱八十夜も今なるべし  
十夜かな三心具足のせめ念佛

似合ぬ身の程をかへりミ侍りて

身ぞしやらのしやんふくりんの丸頭巾  
連時宜や背とならバオミ頭巾

冬籠り居間ハいそかし針仕事  
寒き夜も膝をのさばる寐酒哉

似合く糺事や賤がきぬくばり  
かぶりけり衾の代にたうがらし

しがらミとなるや流るゝ年忘れ  
せきぞろやはつせの川の浪枕

面影やかはらけの酔とし忘れ  
餅つきや雪をめぐらす杵の鋒

からうすや餅花いそぐ雨の脚  
歳暮

弓ハ袋かね箱にあり年のくれ  
卯のとしのくれに

冬ぞ残る兎の毛の鋒に歳暮の句  
かけ乞の千夜を一夜や大晦日

在京の時聲を聞て

幸詮 中村氏 清次

伊安

加房 知

似 船

未辨妹 露程子

西村 正直

冷笑子

日向日向縣住 樋口氏

似 船

西村 正直

西村 正直

人見 秀宣

中尾 之

三十九オ

六角のかねよりはやし年のくれ

夜に入ての大路のけしきを

松の火や電光ちよろり年のくれ

限りなさを懸乞の目にや年の暮

大坂住 札

似 似

同

「三十九」

### 新刊紹介

暉峻康隆・郡司正勝著

(a) 「元禄文芸復興」

(b) 「市民文学の開花」

「日本の文学」シリーズの4・5で、二書あわせて近世文学史を形成する。文学史上における近世文学の特質を明らかにし、ジャンル別・時代順に、近世文学が通観されている。文学を文学としてとらえ、それぞれのジャンル、代表作品・作家の意義や価値を主体的に把握して論を進め、著者の姿勢が明確にうちだされている。そこから近世中期の文学という、従来の近世文学史

に見えないとらえ方がされており、当然思潮的な把握となつて、各ジャンルや作品・作者の解説に終始した多くの文学史と異なり、読者に、その内容について対決を迫るものとして存在している。その意味で、国文学を学ぶ者の一読すべき書であり、学生諸君は最少限本書に盛られた事実だけは知つて欲しい。詩歌・小説が暉峻氏、演劇が郡司氏の執筆である。

(至文堂刊・(a)昭和四一年五月刊・B6五〇円。(b)昭和四二年三月刊・B6五五〇円(予価))

\*なお「国文専修室」に直接申しこまれれば、二割引でおわけします。

### 「国文学研究」投稿規定

- 一、投稿論文は原則として、四百字詰原稿用紙三十枚以内とし、別に八百字以内の要旨を添えること。
- 一、投稿論文には住所・卒業年度・職業を明記すること。
- 一、投稿締切日は、五月二十日及び十一月二十日とするが、随時投稿されたい。
- 一、採否に関しては編集部に一任されたい。
- 一、校正は初校のみを執筆者に回し、以後は編集部が行う。